

第27回・本願寺道路③ 道路の完成とその後

北海道の道路事情

江戸時代、松前藩は北海道の道路整備を全く行いませんでした。その最大の理由は、防衛上の配慮といわれています。この藩はアイヌに対し、過酷な扱いを続け、それが原因で度々アイヌの大規模な反乱が起っていました。藩の首都を天然の良港を備え肥沃な平野が広がる函館にせず、三方を山で囲まれた松前という狭隘な土地にしたのもそういった防衛意識の表れといえます。このことは、日本ではじめて武家政権を確立した鎌倉幕府が江戸に首都を置かず、鎌倉に構えたのと同じ理由といえます。

北海道の道路整備を本格的に進めたのは、江戸幕府でした。江戸時代後期、ロシアと日本は国境問題や開国をめぐり緊張関係にありましたが、松前藩は自家保存のため、そういった情勢を意図的に隠へしていました。この状況に業を煮やした幕府は北海道を松前藩から取り上げ、直接開拓に取り掛かります。幕府は沿岸の交易場所を請け負っている商人に道路開拓を命じ、各地の場所を道路で結んでいきます。このようにしてできた道路は、沿岸を経由するため、遠回りになり、函館から札幌に行こうとすれば、内浦湾沿いに長万部へ進み、黒松内を経て、歌棄に出た後、雷電峠を越え、岩内から余市に至り、小樽から銭函を通って札幌に入るといって大変な遠回りをしなければなりません。雷電峠や銭函峠は大変な難所であり、日本海が荒れる冬場には海岸沿いが通行止めとなることも少なくありませんでした。実際、現如上人一行がこの道を通った際には、函館から札幌まで13日間もかかっており、危険な雷電峠を渡る様子が錦絵として残されるほどの苦難の道のりでした(図1)。こうした中で、東本願寺は、より安全で短い距離の幹線道路の建設という課題に取り組むことになりました。

東本願寺は、当時開拓使に勤めていた松浦武四郎(図2)に新道建設について助言を求めます。武四郎は北海道の名付け親であり、幕末に何度も北海道へ調査にわたり、優れた紀行書を多数書いています。その武四郎が、1858年に札幌へ渡った際に踏破したのが、後に本願寺道路となる伊達市尾去別から平岸に至るルートでした(図3)。この時武四郎は、「有珠、虻田に道を開けば、その便利いかばかりならん」と書き残しています(蝦夷日誌)。彼の助言を受けて、東本願寺はこのルートに道を開くことに決めます。室蘭から伊達までは幕末に建設された道路を使い、室蘭と砂原(または森)間は、冬でも荒れることの少ない内浦湾を船で渡るといって安全で短いルートという課題を見事にクリアした選択といえます。



図1. 雷電峠を越える現如上人一行



図2. 松浦武四郎



図3. 本願寺道路のルート

本願寺道路の完成と変遷

新道開削にあたり、一番の問題となったのが、人夫の確保でした。当時の北海道には、大人数の人夫を集められるほどの人口は住んでいませんでした。幸い、この年の春に、仙台藩の支藩である亶理伊達藩が有珠に集団入植しており、士族移住者の中から50名を雇い入れることに成功します。さらに地元のアイヌを多数雇用しました。彼らは地元の地理に精通しており、道案内におおいに役に立ちました。これに東本願寺の僧侶たちと北海道への道中で募集した平民の移民も加わります。身分も言葉も異なる平民・士族・アイヌ・僧侶という日本の歴史の中で唯一となる組み合わせによる共同事業がこうして始まりました(図4)。道なき道を切り開くこの難工事は、「断崖の陰をおそれず、害虫、餓狼と戦い、樹かげに露をしのぎ、石を枕し雪をしとねとして、荊棘を開き、芒叢をかり、千苦万苦よく功をなせり」(北海道通覧)というように大変な困難を伴いました。伐木幅3間(約5.5m)、道路幅9尺(約2.7m)、橋の架設103箇所、谷間の板敷き17箇所、作業人員述べ55300人、所要経費約1万8千両というとてもない労働力と多額の経費をかけ、工事開始から1年余りたった明治4年7月、ついに本願寺道路は完成します。この年の春、平岸に水沢からの集団入植があり、すでに開拓使の手により平岸街道が整備されていました。天神山ふもとの澄川墓地に位置する平岸街道の終点に本願寺街道が接続し、函館―札幌間の幹線道路が完成しました。しかしながら、それからわずか2年後の明治6年、お雇い外国人ケブロン(ケブロン)の助言を受けて、現在の国道36号線の前身となる札幌本道が完成すると、本願寺道路は険阻な山道であることが敬遠され、一時的に通行量が激減します。しかし、建設当初の幹線道路という目的からは外れたものの、喜茂別・留寿都・壮瞥の入植はこの道を唯一の交通路として行われ、石山・藤野・簾舞地区の開拓もこの道路によって進みました。また、定山溪温泉も年々入湯者が増え札幌を代表する観光地として発展する基盤になりました。定山溪と喜茂別間は一時期通行が絶え、荒れるにまかせる時期もありましたが、昭和28年には、札幌と道南を最短距離で結ぶ幹線道路と位置づけられ、国道230号線へ昇格します。現在では、平均交通量が1日1万台を超える日もあり、北海道の大動脈として重要な地位を占めています。

参考資料 東本願寺北海道開教百年史 真宗大谷派北海道教務所

現如上人―その生涯と北海道開拓― 真宗大谷派札幌病院

星霜1北海道史(1868-1945) 北海道新聞社

バックナンバーお届けいたします。ご希望の方は販売所までお気軽にご連絡ください。ご自宅までお届けいたします。

【編集後記】 歴史とアイデンティティ

参考資料「現如上人―その生涯と北海道開拓―」の巻末に載っている座談会で、北海道民の歴史の無関心さについて、「自分が生きているところの歴史を知らない人間が、そこで生きていると云えるのだろうか。」という言葉で痛烈に批判されています。実は、これと同じ言葉を学生時代ドイツのビアホールで言われたことがあります。スペインのバスケット出身だという青年に私が、スペイン人ですか?と聞くと、彼は断固とした表情で即座に、いや私はバスケット人ですと言いつち、その後、先ほどの言葉が続きました。歴史を知ること、自分が何者であるかというアイデンティティは切り離せないものです。せめて普段暮らしている平岸の歴史ぐらいいは知っておきたいと思えます。

執筆者：道新永田販売所営業主任 伴野卓磨

1977年生まれ、登別市育ち。金沢大

理学学部地球学科博士課程(古生物学専攻)を

修了後、六花亭に入社。2011年より現職。

◇発行元◇

(有)北海道新聞永田販売所

〒062-0936

札幌市豊平区平岸6条13丁目7-18

TEL: 0120-128-348

Fax: 0120-128-358



図4. 本願寺道路開削風景

◆この連載は毎月1日・15日の北海道新聞朝刊に折り込みしています。

76.5MHz
FM Radio Station **APPLE**
FMアップル(76.5MHz)にて
「平岸の歴史を訪ねて」放送中!
今月は8月20日(木)午前11時から